

学科内 LAN の構築と活用

学院手話通訳学科 市田 泰弘・木村 晴美・小藺江 聡・宮澤 典子

手話は視覚言語であり、手話を取り扱った教材の提示や課題の提出は基本的にすべて動画の形をとることになる。動画は、かつては VHS をはじめとする磁気テープによるものが主流であったが、デジタル化が進展し、現在ではパソコン上で扱うことができるようになってきている。こうした動画技術の発展に対応し、最新の技術を最大限活用した効率的なシステムを整えることは、当学科の目標達成のためには必要不可欠であり、学科としての重要課題のひとつである。

当学科では 1990 年の学科開設時から S-VHS 規格による編集システムと、再生用デッキとモニターからなる個別学習システムを導入していた。しかし、その役割は動画資料の蓄積と授業時間外の個別的利用にとどまっていた。1998 年の新学院棟への移転にあわせて、DV 規格のノンリニア編集システムを導入するとともに、1 本の DV マスターテープから同時に 10 本の VHS テープへのダビングができるマルチダビングシステムを導入した。ここに至りようやく、課題として事前に動画を学生に配布したり、授業中に録画したものを学生に配布するなど、動画教材を最大限活用した授業の可能性が開かれた。しかし、テープが増えることによる管理の困難さや編集・ダビング作業の非効率性、映像の劣化など、多くの問題点もあった。

2002 年、デジタル化の進展により、パソコンでの動画の取り扱いが容易になったのを受けて、動画教材の本格的な電子化に取り組むとともに、学科内であればいつでもどこからでも動画教材が利用可能となる学科 LAN の構築を行った。当初は本格的なビデオオンデマンドシステムを導入する計画もあったが、予算の関係もあり、汎用ソフトによる簡易システムとなった。しかし結果としては急速な技術革新によって専用システムが陳腐化するという弊害を避けることができた。

クライアントについてはノートパソコンを採用した。これは、個別学習室だけでなく各教室での使用も想定したことに加え、VHS デッキとテレビモニターのセットからなる既存の個別学習システムと並行使用するにはデスクトップパソコンの設置スペースがなかったためであった。

一方、VHS によって蓄積された既存の動画資料の電子化については、DVD 規格が乱立していたため、なかなか踏み出せずにいたが、2004 年以降、順次 DVD 化を進めた。当初導入したノートパソコンには DVD ドライブが内蔵されていなかったため、個別学習システムに DVD プレーヤーを追加するという方法をとった。

その後も状況は大きく変化している。パソコンに標準搭載された動画編集ソフトの基本性能が上がり、高機能なノンリニア編集システムは不要となった。外付けハードディスクの大容量化と低価格化は、動画の DVD などのメディアへの保存を不要にし、バックアップ機能の充実もあって、すべての動画を一括保存・管理できる可能性を開いた。

現在、初期に導入したクライアントパソコンやサーバはすでに耐用年数を過ぎ、不調がめだっている。定員増に対応するため補充した Vista 搭載機種も、OS 移行初期の製品については、スペック不足が顕著で処理速度に難がある。今後、新 OS「Windows 7」への移行にあわせてシステム全体を再度見直し、最新の映像技術を活用できる体制を整えていきたい。